
リトル・ギル・キングダム

一縷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトル・ギル・キングダム

【Nコード】

N2204G

【作者名】

一縷

【あらすじ】

両親を事故で亡くした少女はある日、奇妙な王国へと手招かれる。王子の憂い、狐の嘲笑、町にいまだ残る、魔女の呪。全てを背負えない。耐える両脚が、私にはないから。

捲られだす絵本

ローズマリー・ギーレンがとうとう亡くなった。

機械音と土の匂いが混在した小さな町、トロイトランドはその噂で持ちきりになった。

更に来週にも彼女の息子夫婦が越して来るらしいという噂も広まり、彼女を良く知ると思いこんでいる人間は、誰しもが驚きの色を隠せなかった。

ミセス・ギーレンの息子は既に亡くなっているのだと、生前の彼女自身の口から訊いていたからだ。

そして彼らは、口を揃えてこうも言う。

「あの家に住むなんて、正気の沙汰とは思えない」と。

* * *

授業の終わった小学校からは、大勢の生徒達が騒がしい靴音を鳴らしながら校門を出る。

その中に混ざるのは、一台の車椅子。

笑いはしゃぎ合う周囲の子供達に見向きもせず、それは乗り手の少女と、ハンドルを持つ女性と共に、まるで居ぬもののように彼らの合間を器用にすり抜けてゆく。

だが自然、子供達の奇異な視線は彼女らに注がれてしまう。そういったものに慣れてしているのか、まるで気付かないのか。小さなさざめきに一切の反応も示す事なく、車椅子に乗ったマルガレーテ・メーテルリンクと、彼女の世話を仕事に含めた、家政婦であるアニーは進む。

青い目に、背シートを覆う長さの金髪を持つマルガレーテの骨董人形さながらの面差しは、これから葬列へ加わる者であるかのように暗く沈んでいた。

彼女は生まれつき足が不自由なのではない。二年前まで、マルガレーテの両脚は確かに地を踏みしめていた。

生活が一変したのは、両親と乗っていた車が衝突事故に遭ってからだ。

二人は即死し彼女だけが生き残ったが、その記憶は一生、疼痛以外
の感覚を持つ事の無い両脚と、傷跡という目に見える形をとって、
彼女の体へ刻み込まれた。

以来マルガレーテは叔父の家へ引き取られたのだが、世にありふれた一つの悲しむべき出来事に対する始末の全てが済んだ後、活発だった一人の少女の唇は、綻びすら浮かべなくなっていた。

「グレートヒエン、お帰り」

マルガレーテを愛称で呼ぶ、深みのある穏和な声。マルガレーテは自分と似通った髪と瞳を持つ優しい青年が、校門前に停められていた車の窓から顔を出したのを見て尋ねる。

「どうしているの、ヨハネス」

ヨハネスと呼ばれた青年は柔く笑む。

「今の時間の講義が休講になって、暇だったし君の授業がそろそろ終わりそうだったから、アニーに鍵を借りて待ってた。さて、帰ろう。今日は僕が運転するよ」

通り過ぎていく女子生徒が全員、夢見る眼差しで振り返る。黄色い声で「王子様」と呼ぶ相手はヨハネスだろうが、三人はまるで気付かない風だ。

ヨハネスは外へ出、先程から何も話そうとしない、地味な顔を常に仏頂面にし、髪を一本残らず後ろで束ねている女性、アニーと共にグレートヒエンを車に乗せる。ありがとうとグレートヒエンが無機質に礼を述べれば、いいえお姫様、とふざけた調子で返して来た。

車が発進し、窓越しには古い町並みの隙間から、ビル等が建設される過程が其処かしこに見えた。だがグレートヒエンは外へ目を遣りはせず、鞆の中から一冊の本を取り出す。

ミラー越しに見たのか、ヨハネスが尋ねてきた。

「もう少しで読み終わりそうだね。それ」

「うん、多分」

「じゃあまた、何か貸そうか」

「うん」

ヨハネスはハンドルを右へ切る。彼を、グレートヒエンは慕っていた。事故から変わってしまった自分を、慰めるでも諭すでもなく、ただ静かに受け入れてくれる。兄弟を持った事は無かったが、兄というのはこういった存在なのだろうと思う。

二十数分の道程を終えて家に着くと、グレートヒエンを降ろしながらヨハネスは言った。

「もうすぐだね」

「何が」

忘れていたの？とヨハネスは目を丸める。

「君の、十二歳の誕生日が、だよ」

忘れていた。

ヨハネスは優しい口調で語る。

「その日は何より先に、イルマさんとホラーツさんのお墓へ行つて、二人に会いに行こうか」

「・・・うん」

ヨハネスはグレートヒエンの頭を撫ぜ、手を洗ったらお茶にしよう
と微笑んだ。

アニーが出してくれた菓子と茶をヨハネスと食べた後、一階にある
自分の部屋へゆく。

ドアを開ければ閉め切ったカーテンに色づけられた晩冬の陽光が、
宙に舞う埃と共に、飾り気のない部屋の中心へ向かって薄暗い渦を

巻いていた。

グレートヒエンはカーテンを開ようとはせず机へ向かう。机上にある写真立てには、一枚の家族写真が納められていた。

晴天の下、両親の間で、二人の腕を取っている自分。今は遠く離れた、車で移動して半日はかかる元の家の前で撮った写真だ。

満面の笑みのグレートヒエンと、彼女を優しくに見つめて微笑む父と母。グレートヒエンにとって最上の幸福だった時を焼き写した、この世に於ける小さな天国。

「……………ただいま」

グレートヒエンは、両手で写真を持ち語りかけるよう呟くが、力無いその声は煙った渦へと呑みこまれる。

目を伏せ、一番上の抽斗を開き元は菓子詰めてあった、青と碧の小鳥が描かれた、何処にでもあるような缶の蓋を開けた。菓子の代わりに入っているのは、共通性の無い小物達。失くさぬよう、グレートヒエンが纏めた小さな思い出の数々だった。

毎日母が朝と夜に髪を梳いてくれた、歯が二本欠けた櫛。最早レンズはなく、折れ曲がった眼鏡。剃刀。腕時計の秒針はもう時を刻む事はない。母の愛用だった、ふざけて付ければその度叱られた赤い口紅。香水の瓶にはまだ中身が残っている。花や昆虫を愛していた父が、それらを観察する為に使っていたルーペ……………この中のあらゆる物が二人の体温、匂い、見つめる視線の気配を確かに保っていて、グレートヒエンはこれらを手に取り眺めるのが好きだった。

感触を確かめるよう、慈しむように一通り撫ぜ、不意に何かを思い出したようにグレートヒエンは菓子缶をそっと持ち上げる。

其処にはくすみ、鈍い光を纏った一つの鍵があった。

ヘッドは三つ葉のクローバーのデザイン。かつて、万遍なく表面を彩っていたであろう真鍮はその殆どが剥がれ落ちてしまっただけが、その古めかしい様が却って鍵を魅力を持たせているようでもあり、使い古される以前の気品も未だ衰えてはいない。

この鍵は家族の思い出とは一切の関わりがなく、大事な物である筈が無いというのに、何故かグレートヒエンは此処にこうして置いている。自身でも理由が解らずに。この鍵を持つてから凡そ一年半。時折存在を思い出しては自問するが、答えは分らない。

不意に蘇るのはとある、狂った戯言。それ以外に思い出せる事は無い。

緩く息を吐き。グレートヒエンは菓子缶を平生の位置へと戻し蓋を閉じ、抽斗を締める。

本の続きを読もうと鞆から取り出し目的のページを開いた時、風の悪戯だろうか。先程締めた抽斗から、囁き声のようなものが訊こえ出した。

「ア……………レーと、ア……………グレート……………
……………」

「……………ヒエン……………グレートヒエン」

始め空耳かとも思ったそれは、ステレオのボリュームを上げるようにして次第に確かな音となる。無明の闇を手探りで掻き分けるかのような、訊き覚えのない女性の声の音は、何故かグレートヒエンの名を呼んでいるように思われた。

そんな筈のある訳が無い。幻聴であるに決まっていると思いつつも、そつと抽斗へ手を掛けると、

「グレートヒエングレートヒエン……………グレートヒエングレートヒエングレートヒエン……………」

狂気じみた、しかし歓喜に歌う声。最後の方は耳を劈く甲高い叫びだった。同時にその抽斗の中でのみ地震が起きたよう、上下に激しく揺れ動き出す。

グレートヒエンは心臓が潰れる程に驚き、車椅子の背に勢い良く体をぶつける。

「止めんか、止めんか、止めんか!!」

と思えば背後から、気取りながら怒る声が飛んで来た。

だが抽斗の揺れは収まろうとせず更に激しくなる一方だ。倒れたペロン立ってから中身が飛び散り、立てかけられていた本もドミノ状に崩れ、ピアノの鍵盤をのたうつような女性の歌声もいよいよ目茶苦茶になってゆく。グレートヒエンは、本の下敷きになりそうな写真立てを寸での処で掴んで抱え込み、両腕でぎゅっと抑える。背後からの声は、再度怒鳴りたてた。

「彼女は怯えているだろう!」

「あら嫌だ……わたくしったら」

叫びから女性の歌声は恥じらうものに早変わりし、抽斗の揺れは急速に収まった。

ぎぎぎぎ、と錆びたぜんまいの廻る音が背後から訊こえ、恐怖に固まってしまったグレートヒエンは首と目だけを何とか後ろへ向ける。其処に居たのは手足の短く恰幅の良すぎる、燕尾服を着たぜんまい人形。手には黄色い花柄のステッキを持っている。両の手の甲、足の甲、頭、背に、苔がこびり付いた錆びたぜんまいが、子供の戯れに無理矢理捻り込まれたかのように埋まっている。ぎよろりとした右の目玉は辛うじて眼窩に嵌めこまれているものの、今にも零れ落ちそうだった。

口は小さく、魚のそれ。

埋められた部位がぎこちなく動く毎に、それぞれのぜんまいが油の切れかけた音を立てながら左へ廻り、グレートヒエンへと近付いてくる。

前方からは奇妙な歌声の漏れる抽斗が、後方にはグロテスクなぜん

まい人形が。グレートヒエンは、どちらにも逃げ場を失う。

「ああ、ああ可愛いグレートヒエン。どーか恐がらないで！」

抽斗からはグレートヒエンを慌てて宥めるように再び歌声と揺れが起こり出し、寧ろ不安を煽られる。

「止めると言つとるだろうに！申し訳ありません、マルガレーテ様。今こ奴めを落ち着かせます」

一喝した後に媚を売る風に首をこちらへ曲げ、柔らかく告げたかと思えば、ぜんまい人形は十分に関節が曲がらない手足を存分に前後へ動かしながら速度を速めて進み始め、グレートヒエンの座る車椅子よじ登りだす。

冗談じゃない。グレートヒエンは机の上にあつた本を掴むと、ぜんまい人形に向け投げつけた。頭に当たり、人形はごとりと音をたて床へ倒れる。拍子に右の目玉が取れて転がる。

「ど、どうなさいました！」

混乱していたグレートヒエンは立ち上がれない人形を後輪で踏み潰してしまおうと、勢い良く車椅子をバツクさせる。人形が悲鳴を上げた時。抽斗が開き、死人めいた白い腕に、鉤爪を持った両手が花開くよう飛び出たと思うと、その長い指でグレートヒエンの細い腕を二重に巻いて掴んだ。氷を思わせる冷たい手の感触にぞつと振り返るグレートヒエンに、声は哀願するよう歌う。

「可愛　いグレートヒエン。乱暴それはいけないわ、とてもいけない事なのよ！お願いだーから落ち着いて。わたくしたちはあなたが大好きだから、乱暴なんかしないものお」

怯えさせておいても思ったが、欠片も悪意のない歌声に強張っていた体から力を抜き、荒い呼吸を整える。

グレートヒエンの腕を優しくさすりながら奏でられる今にも泣き出しそうな歌声は、成人女性らしい声の調子にそぐわず、純真な幼子そのものだ。

「だからと言つてはしゃぎ過ぎはいかん。全く、愚かしいにも程がある」

唯でさえ動き難そうな体をばたつかせて起き上がり、外れた目玉を拾い上げて嵌め、頭のぜんまいを回す。

「グレートヒエン……ごめんなさい謝るわああー。何も言ってくれないのね……どうしましよー！声を忘れてしまいう程に怯えさせてしまったのかしら？」

優しく腕をさすっていた手に、力をこめて折れそうな程に握られ、グレートヒエンは思わず顔をしかめた。

確かにこの奇怪な出来事が起こってから、一言も声を発していない。訳の分からなさ過ぎる現状に言葉が追いつかなかったからだ。

だがこのまま黙っていれば、本当に腕を折られかねない。

グレートヒエンは、痛みに耐え食いしばる歯を解いた。

「別に……何も、忘れてはいないよ」

腕の声はぱつと華やぐ。

「本当に？本当ーねー!?」

「……本当に」

よかった素敵よ嬉しいわ、と女は歌い、グレートヒエンの腕をぶんと振る様は、上機嫌な子供のようだ。

「ああグレートヒエン。あなたの声はなんて可愛らしいのでしょう！野に咲くお花に声があたってあなた程に愛らしくはないでしょうし、ナイチンゲールだって、啼くのが嫌になって、自分の羽をぜーんぶ筆ってしまうわあ。ねーラインハルト。そう思わなくて？」

「当たり前な事を言うでない、きちがい女。マルガレーテ様の御声は女王の傑作である！彼女の唇が開かれた瞬間、その麗しき御声の紡がれるのを我先に聴かねばと、ありとあらゆる被造物は彼女の足下へ平伏すだろう！」

何故か腕に対し敵愾心を剥き出しにし、太い腹を大いに突き出しながらラインハルトと呼ばれた人形は怒鳴る。腕はぱんつと両手を合わせた。

「あら素敵！きつと女王さまは、グレートヒエンを天上へ招待する

わ。天使がグレートヒエンをお迎えに来るの。そして歌ってもらうの、きーっとわたくしも一緒なのー！」

「……………それで」

照れるを通り越し、うんざりする程に大袈裟に、支離滅裂に褒めちぎる手とぜんまい人形の会話は延々と続きそうで、この異様な出来事に少しばかり慣れてきたグレートヒエンは横からさり気なく止めに入ってみた。

人形はぎぎ、と油の切れかけた音をたて腕を睨み、ぎぎ、首を捻りとグレートヒエンを見た。

「こ奴めがかき混ぜてくれた所為でなかなか本題に入れずに困っていた処を、お助け頂き感謝致しますマルガレーテ様……………」御覧の通り、頭の螺子が所々抜けているようなおかしな女です。

私達は貴女様を呼んで参りましたのです。我々の住まう王国から「ぜんまい人形が話し、引き出しから鉤爪のような指を持つ腕が飛び出る王国などグレートヒエンは知らない。

人形は更に混乱に陥れる科白を告げた。

「長い長い年月を経て、やっと何者かが王国へやって来るのだという事は、分かっております……………マルガレーテ様、貴女様です」

「私……………?」

「そう、見目麗しく偉大なるマルガレーテ様、貴女様です。私共はずっと待つておりました。貴女様がやって来るのを！どうか王国を、我らが女王を御救いくださいませ！！」

熱の籠った口調で、ぜんまい人形は両手を広げながら語る。

「そーう、そうよねラインハルト！グレートヒエンはわたくし達を助けてくれるの、女王さまを救ってくれるの！」

腕が再び騒ぐ。

「どうか。一刻も早くこちらへおいで下さいませ。貴女様の力をお借り致したい！」

「待つて、頭、下げないで」

人形の懇願する様を見て、どうすればいいのか分からなくなる。

「いいえ、上げる訳には」

「どうして私に言うの。女王って、誰？」

理由も分からないのに突然、国に来てくれ、救ってくれと言われてもどうしようもない。

「我らが女王は、王国を統べるお方であり、そして唯一の存在・・・
・・・貴女様が、神と呼んでおられる者に近いかと」

グレートヒエンに信仰心は余り無いが、いるにはいる。

「けれど彼女はあ奴のような、まっこと醜き人間共が都合良く創った空想の産物ではありません！彼女は確かに存在し、我らはその加護の中に生きています」

侮蔑を帯びた口調になっていたぜんまい人形は、決して貴女様の事ではないのです、と慌てて付け加えた。

「我らは幸せでした」人形は続ける。「心優しき彼女の統べる王国は、平和そのものだったからです」

「けれど反逆者が現れ、彼女を暗く深い地の底へと封じてしまったのです！それからというものは荒れ、悪しき者どもが跋扈し・・・
・・・女王の臣下は次々に殺され、私と使えぬこやつと、後は数えるだけに・・・」

人形はおお！と叫び顔を覆う。ああ！と腕も泣くように歌い、自身をばたつかせる。良くあるような物語を語る口調は芝居の台本を読み上げているようで、それが重要だとは分かるが、グレートヒエンははあ、ふうん、と溜息のような相槌を打っているのだった。

「最早一刻の猶予もありません、私達には今、貴女様の力が必要なのです。戦を起こし、愚昧なる者どもから彼女を取り戻さなければ、でなければ王国は滅びてしまう。貴女様は特別な力を持っておられる。それは闇に覆われた王国に射す光となって我らを導いてくださるでしょう」

「力、って」

この小さな体の、何処にそんなものがあると言うのか。しかも両脚

が動かないのだ。

「どうして信じられない事があるのかしら、可愛ーいグレートヒエン？」

割入ってきた腕は楽しげに、机を揺らした。

「この中にある鍵を持っている。それだけーであなたが特別だって事なのよー？」

「・・・鍵」

手の抜き出た抽斗の中の、菓子缶の下にある、あの古めかしい鍵の事だろうか。

「そーう、わたくしの手の下にあるものよー」

何故今、それが関係して来るのだろう。

人形は一步前へ出てせがむ。

「どうかその鍵を私に見せて下さいませんか。久方ぶりにこの目へ入りたいのです」

「まあー良いわね！今わたくしは見れないけれど。手に取って、グレートヒエン！」

プレゼントの箱を、開けてと乞う子供のように人形は言い、腕は歌う。

それらを交互に見、促されるまま抽斗を開く。

中では菓子缶を挟むようにして鉤爪を持つ青白い腕が二本、抽斗の奥に肘から文字通り生えている。グレートヒエンは、死人の両腕を抽斗に入れているような気分になった。

そうして菓子缶の下から鍵を取り出そうとした時。いつもより缶の重みが増したかのように思えた。

一瞬、戸惑う。

何故かはわからない。だが彷徨った視線が、人形が微動だにせずこちらへ目を向け、腕が祈るよう双の手を組んでいるのを捉えた処で、僅かに力を込めて缶を持ち上げ、鍵を手に持った。放つ光が強く感じられるのは気の所為の筈。

「これ・・・？」

そのまま人形に見せると、彼の目玉は飛び出さんばかりになった。

「正しくそうで御座います！デーヴァ。本物だ！！」

「ああ、やっぱりなのね！」

腕と人形は歓喜に踊る。腕は自身を振り回し、人形は螺子の消耗など構わずに円を描いて跳びはねた。

「じゃーわたくしたちの待ち人は、あなたで間違い無いのだから。

ねーライインハルト、拍手をしましょ、とびつきーりたくさん！」

「そうだ。我らの救い主に祝福の喝采を……マルガレーテ様、万歳！」

彼らは嵐のよう激しく手を叩く。それは全ての始まりの合図。グレートヒエンは狼狽え、鍵を持ったまま腕と人形を交互に見た。

ノックの音と、アニーの呼ぶ声に目を醒ます。

「マルガレーテ、寝ているのですか」

既に闇に包まれた部屋の中、グレートヒエンは机に置かれた鞆の上に突っ伏して眠っていたようだ。

寝惚け眼を擦りながら、先程まで見ていた夢を思い出す。

腕がいて、ぜんまいが埋め込まれた人形がいて。掴まれた腕の感触までもが生々しく蘇る、あんなにも奇妙な夢は始めてだった。拍手の音が滲み出したのを最後に記憶が途切れている。今思えば、始めから名前を知っていたのも不思議だ。

「入ります」

ドアを開けたアニーが、暗い中机に居るグレートヒエンを捉え、何事かと無言に訝しむ気配がした。

「夕食です、具合は」

「悪くない。寝てただけだよ」

アニーは部屋の灯りを点け、彼女にしては珍しく抑揚のある一言を落とした。

「……寝てただけ、ですか」

グレートヒエンも、机の有り様を信じられなかった。夢と同じに、
その上にはペンや本が散乱していたからだ。
そして掌中にある固い、小さな何かを包んでいる感触。
そっと開けば、鍵が光を弾いた。

キツネと人形

今日この学校に、ローズマリー・ギーレンの孫が転校して来るらしい。

そんな噂が広まったのは教師が来る十分前。

教室内の雑談内容はその一色に染まり、読書をしているグレートヒエン以外のほぼ全員が熱っぽく、或いはある種の怯えを見せながらぎりぎりまで会話していたが、チャイムが鳴った瞬間に水を打ったよう沈黙する。二つの足音が訊こえる廊下の音に耳を凝らし、視線を一齐に入口へと集中させた。

開き、まず始めに顔を表したのは、間の抜けた顔の中年男性。このクラスの担任だ。

教師は悪戯めいた笑みで、わざとらしく肩を竦めてみせる。

「何だ、皆気付いてた？折角サプライズにしようと思ってただけどなあ」

「こつちにだつて心の準備つてのがあるんだよ。そんな気遣い要りません」

生徒らの不平に教師はへらりと笑って答える。そして教壇へ進み出入口に向かい入っておいでと呼び掛けた。

生徒は好奇と恐怖の目を、再び其処へと向ける。

入って来た少年は、紅茶色の細い双眸で睨むよう前方を見据えるだけ。

手入れの行き届いていない、ぼさぼさと広がる髪は赤狐の体毛のよう。教師に前を見て、と促されれば生徒達を睥睨し、何が気に入らないのか舌打ちをした。それは小さかったが、静まり返った教室で全員の鼓膜を震わせるには十分だった。

空気が瞬時にして凍りつく。グレートヒエンの顔は未だ本に隠れている。

「自己紹介は？」

「……………ロビン・ギーレンです」

教師に言われて面倒だが仕方がなく、といった体で少年　ロビン・ギーレンは吐き捨てるよう答える。

それが合図となり、生徒達は低い声で言葉を交わし始めた。

あれが、魔女の孫　付き合い難そう。それ処じゃない、目が合ったらきつと呪われる。

当人に訊こえないようにと配慮された声は逆に良く通り、活字を追うグレートヒエンの元にも届く。何だろうと本を置き、前へ視線を向けた処で、渦中の人物と目が合った。

少年は釘付けにでもなったようその冷めた目を見開きグレートヒエンを見、僅かに後退さる。車椅子に反応でもしたのか、だがそれにしては余りにオーバーだ。

かと思えば睨みつけられ、拒絶するよう、素早く顔を背けられた。

グレートヒエンは心中で首を傾げる。目には、殺気を感じさせるものすらあった。初めて会ったというのに、どうしてあんな態度を取られてしまったのだろう。

だが違和があった。

「よろしくねロビン。私はキャサリン、っていうの」

明朗な事この上なしと言った体の声が、囁きの中から抜け出る。

生徒達が声の方を見れば、校内きつての美少女と謳われる金髪碧目のキャサリンが、男子なら誰もものぼせ上がるだろう笑顔でロビンへと向けていた。

「仲良くしましょう?」

「……………てめえ!」

ロビンが声の方をちらと見遣った瞬間、グレートヒエンのそれとは違う　憤怒に頬を染め吼える。教師の止めるのも訊かず机の列へ割り行つてキャサリンの前で止まり、驚くキャサリンの机を割るよつに叩いた。

「俺に話しかけるな……………殺されたくなければ近寄るな!」

キャサリンは椅子の背もたれに体を縋りつかせる。

「な、何……何……何で？」

質問に答えようとせず、ロビンは彼のものだと言われた一番後ろの席へ歩いて行く。だが彼の頭すれすれに椅子が投げ付けられた。盛大な音を立て壁に当たり、女子が悲鳴を上げる。

転校生が振り返れば、只一人立っている小学生らしからぬ熊の様な図体の少年は、乱暴者として怖れられているテオドルという名の少年だった。キャサリンを好きなのではないかと、専らの噂がある。

「おい、転校生」

中学生との取っ組み合いにも勝ったテオドルの、凄味を利かせた声が低く響く。「新入りとして取るべき態度を知らねえのか」

「は。何、お前？」

ロビンはテオドルに怯む様子を露も見せず、彼を嘲る。

「あいつが好きなのか？……見た目だけじゃなく趣味も相つ当だなあ」

テオドルは顔を赤らめロビンに殴りかかるが、退ってかわされ、開いた顔面に向かい頭突きを喰らう。身軽だが力のあるその動きで、テオドルは床にどうと倒れた。その様を見下し、ロビンは腹を抱えて笑い出す。

「弱いなあ、泣けてくる。おいデブ！大した力もねえ癖に粹がるからそうなるんだよ」

テオドルは血の流れだす鼻を押さえ、よろめきながら立ち上がる。その顔は怒りに歪んでいた。面白いものでも見るよう、ロビンは彼を見上げている。

「ふざけるなよチビ！」

「………テディ！」

テオドルが拳を振り上げた瞬間、キャサリンのか細い声が耳に届いた。動きを止めてキャサリンへ目を遣ると、ロビンの言葉にシヨックを受けながらも健気な少女の笑顔があった。

「彼とはクラスメイトになったんだし、喧嘩はしないで仲良くしようよ」

テオドールは迷い、そのまま静止していたが、やがて耐えるよう震えながら腕を下ろした。ロビンは二人を鼻で笑い、彼を睨むテオドールの肩に手を置く。

「いい子ちゃんのお陰で助かったなあ。後で花の一つでも持ってつてやれよ」

「それはこつちの科白だ転校生。命拾いしたな」

細かい事に触れずにおくなら。先程の頭突きで倒れたテオドールが敗れたという事になる。

無敗だったあのテオドールが、負けた。あんなチビに。やっぱり魔女の血縁は侮っちゃいけない。

「お前から見てんじゃねえ！」

テオドールは、自分に絡まる不快な視線を一喝で弾く。不様に赤くなった鼻を見ていた生徒達は慌てて前を向き直した。

テオドールは忌々しげに足を踏みならし席へ戻る。

するとロビンがパンパンと手を鳴らし始め、教壇へ向かって机に上がりこむ。大きく息を吸い、ふざけた調子で演説しだした。

「皆さんご注目。僕は今日転校して参りました、ロビン・ギーレンと申す者です。ご存知の通り、ローズマリー・ギーレン。かの悪名高き魔女の孫にございます！」

教室中がざわつく。更に続き、演説者は言葉を吐き散らす。

「お前らローズマリーが死んでもう安心、なんて思ってたんじゃねえだろうな？これで枕を高くして眠れる、呪われる事はもう無いんだって。だが残念、まだまだ続いてくぜ。俺がこの町に来たからにはね！」

子供達は震え上がる。目の前の少年が、ローズマリー・ギーレンの後継者。

「そこで一つ忠告だ。気安く俺に話しかけるな、目も合わせるな。

あのいい子ちゃんみたいにな。町のきな臭さが染み付いた、お前らみたいなクズガキ共と話す気が俺には毛頭無いんだよ。生贄にされたくない奴は従うように。以上だ！」

そう魔女の孫は締め括り、机上から飛び降りる。ふつと顔を上げた時、車椅子に乗った少女が瞬きもせず彼を見ているのを捉えた。ガラス目のような、青のそれはしかし、今は光を持ち彼を放さない。わずか数秒か、或いは数十秒。奇妙な沈黙の後に、ロビンは寓話に登場する狡猾な狐を思わせる笑みを　細い双眸を更に細め、口の両端を存分に上げた笑みを　少女へと向け、席へ戻って行った。その笑みは猟奇的ですらあった。

「なかなか面白い自己紹介だったよ、ギーレン君。やっぱり余所者には刺激が与えられていいねえ」

一人陽気に称賛の拍手を送る教師に生徒一同、絶対零度の視線を向ける。さっきの忠告を忘れたのか。

「じゃあ、次は僕に取り仕切らせてもらうからね」

だが何事もなかったかのように時間は流れてゆく。一先ずは見逃されたのかも知れないと生徒達の口からは、安堵の息が我知らず漏れた。

こうしてローズマリー・ギーレンの孫、ロビンの第一印象は最悪なものとなった。テオドルを叩きのめしただけならば彼はヒーローになっていただろう。だがアイドルであるキャサリンを理不尽な理由から嘲った事から、生徒らの反感を買った。

いや、そんなものがなくとも彼はやはり忌むべき存在だった。

ローズマリーの血縁。この町でのけものにする理由などそれだけで、他に何も要りはしない。

遅れて始まった授業が終わり、教師は去る。だが教室は騒がしくならず、重苦しい空気が漂い、囁き声が飛び交っていた。怖い、近付かないように、無視、魔女の。そんな言葉が多く使われている。

キャサリンは机を女子に囲まれ、しきりに慰められている。テオドルはと言えば常に偉ぶって教室内を闊歩するのだが、今は椅子に座り、視線を合わせれば誰彼構わず無言で殴り倒す勢いの眼光で前を見据えている。この状況を作り上げた渦中の転校生、ロビン・ギレンの姿はない。授業が終るか終わらないかの時分に教室を出て行ったからだ。

車椅子に乗った少女、マルガレーテ・メーテルリンクも居なかったが、一人机で静かに本を読んでいるだけのクラスメイトの事など、誰も気に留めはしない。

付添のアニーには傍の見えない処で待ってもらい、校舎裏の、殆ど人の来ない場所へとグレートヒエンは壁伝いに進む。道が整備されていないので行っではいけないと咎められているが、今はどうしても一人になりたかった。剥き出しの地面は石のように固く冷たく、春はまだ遠い。

十分に進んだ処でポケットから鍵を取り出す。夢を見た時から、こうして持ち歩いていた。

昨日の強烈な夢が色鮮やかに蘇る。目眩を覚え、グレートヒエンは額に手を置いた。

真鍮の剥がれたそれをなぞりながら、何度も疑念を浮かばせる。

何故、彼らが自分を「救い主」と呼んだのかがまるで分からない。

皮肉が過ぎて笑みすら込上げる。

人なみの幸せを、壊したのは自分。それが誰かを救えるのだという。なんという妄想……。あれはやはり夢か、さもなければ妄

想に過ぎない。罪の重みに耐えられないこの弱い心が、醜く歪んだ幻影。なんとという愚かしさだ！

グレートヒエンは左腕全体を覆う長い袖に指を入れ、手首に鋭く爪をたてる。飾らない痛みが腕を伝う。唇を噛みながら、その白い肌を深く抉った。

引き終えた指を袖から出せば爪の中には、抉られた皮膚と血がこびりついており、覗くようにして袖を捲れば五本の捻れた線が出来ていた。

火で炙られるような痛みと、赤い血が滲みだしたのを確かめて息を吐き。袖を元に戻す。こんなものではまだ駄目だ。もつともつと罰がいる。

おもむろに、掌中にある鍵を握ったのと同じに。

鳥が羽ばたき、数歩離れた角から枝の折れる乾いた音が聞こえ、グレートヒエンははつと俯いていた顔を上げた。

角から姿を現し、彼女を見下ろしているのは赤毛の少年。視線が合う。

突如にして脳髄を、記憶にない映像が暴れて巡る。

果てない荒野に続く虹、八つ目の小人、逆回りの懐中時計。針まみれの椅子、ステンドグラスの羽に光、そして無数の赤い目がぐるぐる動く。差し出された手は、

一度のまばたきで。視界は現実を、再び少年を捉える。白昼夢は目眩も頭痛もなく、まるで水を飲み下すようにして頭に染み込んだ。今のは何。いや、それよりも。

(見られた……?)

立っている赤毛の少年は今日、転校してきた少年だ。確かロビン、そう言ったか。細い双眸は、朝に睨まれた時よりも増して鋭い眼光をグレートヒエンに向けている。

グレートヒエンは身構える。だが次に少年は、悪巧みを思いついた

童話の狐を思わせる笑みを、存分に唇の両端を上げて作り、自身の顎に指を当て、翳るような視線で車いすの少女を上から下まで眺め回す。言葉も出せず戸惑い、グレートヒエンは身を竦ませた。

「……………人形、だ。やっぱ」

「……………、……………?」

呟かれた言葉に目を丸めると、ロビンは視線を合せてきた。

「お人形さん、がぴったりだな、お前の呼び名。マルガレーテ・メーテルリンク、ちゃん？」

獲物を見つけ、舌舐めずりするような語調。

「どうして……………」

「どうして名前知ってんのかって？それともどうして、お人形さんなのかって？」

グレートヒエンは黙る。少年は一步、少女に近づく。

「お前の名前を知ってるのは、俺が魔女の孫だから。んなの、訊かなくても分かってんだろ？」

歩んでくる。互いの距離はもう五歩もない。

「もう一つはだって、そうだろ。お前も分かんだろ」

ロビンはグレートヒエンの足元まで来、車いすの両の肘掛けに手を置いて、息がかかる近さでグレートティアに囁いた。

「自分一人じゃ何も出来ない。手を差し伸べてくれる奴が居なけりゃ動かないで、そのままおつ死ぬ。そんな面と格好だもんなあ、お前は……………違う。訂正」

狐は突如、グレートヒエンの左手首を乱暴に攫み上げる。傷口に爪が食い込んだ。

「……………ッ」

突き刺さる痛みにグレートヒエンは、小さく声を上げた。

ロビンはおどける。

「そっぴやあるか、出来る事！だが無様だよなあ……………まあなかなか滑稽で面白いが」

全身の血が凍りつく。やはり見ていたのだ、ロビンは。

一番惨めな行為を。

どうすればいい。

ヨハネス以外の人間に知られると言う事は、どうすればいいのだろう。

グレートヒエンの思惑には、ロビンが誰かに吹聴するのではないかいように利用されるのではないかという懸念は一切無かった。浮かぶのは唯、その行いを知られてしまったのではという一念だけ。

「だがそれだけだ。それしか出来ない」

ロビンはグレートヒエンの手首を更に、前へと引く。

「弱い奴って大嫌いなんだよ、俺。見てるだけで殺してやりたくない」

腰が浮きかけ、グレートヒエンは右の肘掛けを攫む。でなければ引き摺り下ろされそうだった。

「例えば今お前は結構ピンチだ。でも自分独りじゃ、何も出来ない動けない、誰にも助けてもらえない。いつものお姉さまはいないしな。正しくお人形！ぴったりすぎるぜ、そう思わねえ？」

言いながら引きずられ、今にも固い地面へ倒れそうになる。グレートヒエンは右手に渾身の力をこめて耐えている。だがもう、限界だ。
「そ」

「うわあ、何この状況！」

車椅子の後方から訊こえる、アニーに重なったキャサリンの大きな声でロビンは動きを止める。ロビンが前を向くと、その二人が放れた場所に立っていた。

「わ」

「グレートヒエンが落ちるよ、ロビン！」

キャサリンの騒がしい声は、アニーの言葉をことごとく消し去る。

「これはこれは………麗しきいい子ちゃんとお姉さま」

「手を放しなさい」

何処までもふざけるロビンに、アニーは冷たく言い放つ。

ロビンは肩を竦め、少女の手を解いた。

「な。証明されたら？」

耳元でそう、囁きながら。

アニーは無言でグレートヒエンの元まで行き、車椅子をロビンから離れさせる。アニーの無感情な目で見据えられ、「怖いねえ」と薄く笑いながらロビンは踵をかえし去ろうとするが、角を曲がる処で振り返り、怯えるキャサリンに言う。

「キティ。なあ、キティ」

「なあに………ロビン」

「そいつら連れてとつと行け。じゃなきゃどうなるか、分かるな」
口元を手で押さえ、キャサリンは頷く。ロビンはそのまま姿を消すがその時、俯いていたグレートヒエンが顔を上げた。

「待つて」

訊きたいことがある。

車輪を回し、アニーの手元をすり抜けた。

「グレートヒエン！」

キャサリンの止めるのも訊かず、グレートヒエンはロビンを追いかけて角を曲がる。

そうして広がる光景に、無防備な思考だった少女の瞳は、零れる程開かれた。

物音に振り返ったロビンの足元に、子供が手を組んで輪にした程度の大きさの石があった。それ自体は何でもない。問題は其処に、針金で巻かれ括りつけられた猫の死骸。

猫の顔面、胸、腹……体全体が潰されて柘榴のように潰れており、曝け出された肉は未だ脂ののった照りを見せている。投げ当てて猫を殺したのだらう、傍らに散らばる大量の小石にはどれも、赤い血が塗りたいくらわれていた。執拗に狙われたのだらう。顔は原形を留めておらず、季節の為か、血の様子を見る限り猫が殺されてから経った時間が短い所為か、蠅や蛆はたかつてはいない。

未だまどろみにある土。地中に潜み、これから現れるであろう荒々しい息吹を秘めた気配の上で、無造作に棄て置かれた氷の如く冷たさと、ぬめり気のある静けさを纏った死という終りだけは対照的に腐敗の只中にあつた。

「うあ……」

死の共通が点火となり、脳裏で火花が弾け、呼び起こされる過去の記憶。グレートヒエンは歯の根が合わぬ程がちがと震え、ロビンは激昂する。

「何しに来た、手前!!」

「うう、う……うわあああつ!!」

少女は喉を裂く声にならない叫びを天に上げ、演じているようにがくんと体を横へ垂れた。

「ああ、お前はあ!!」

叫び、ロビンは少女へと手にしていた石を投げようとする。

「やめなさい!!」

威圧あるアニーの声に、更に予鈴のベルが被さる。ロビンは舌打ちして石を地面へ落とし、動こうとしない車椅子の少女を殺気の籠った目で強く見据えながら通り過ぎる時、忌々しげに吐き捨てた。

「お人形さんが身勝手に動くんじゃねえよ！」

そうして一切の感情の宿らぬ、だからこそその迫力を持ちえたアニーのアッシュグリーン双眸にも同じものを向け、足を乱暴に踏み鳴らしながら角を曲がる。彼女らから離れた処へ影で様子を見ていたキャサリンが走り寄って来、彼の真横につき懸命に歩調を合わせて涙ぐみながら弁解の言葉を連ねようとする。

「ロビン、ごめんね。私止めたんだよ？でもね……」

だが睨みあげられ、体をびくりと震わせて立ち疎み、それ以上着いては行けなかったが、縮み上がった喉から声を絞り出す。

「分かつてる、誰にも言っちゃダメだつて、二人共にちゃんと言っておくから！だからお願い。グレートヒエンにこれ以上乱暴しないで」

それに答えを示す事なく、ロビンは歩み去って行った。

遊園地へ、などと。

どうして言ってしまったのだろう。

ああそうだ。

昇格の機会が巡って来てから、家に居る時間が目に見えて減り始め。悲しそうにごめんと謝る父に、母は無理をして笑顔を繕っているように、そのどちらもグレートヒエンには悲しかった。だがグレートヒエンがあの日。久し振りの父の休日、

「遊園地に連れてって」と強請ったのは家族と過ごす時間が欲しかったのでも、子供なりに、両親の鬱屈した気が晴ればと考えたわけでも無い。美しく泣けるような、そんなお話じゃあない。近くに建てられブームになっていた其処に、既に家族と行った他の友達のようにして自分も遊びたいという。唯の我儘でしかなかった。

赤信号を暴走するダンプ車。永遠のような一瞬の衝撃。ぐるぐるぐ

るぐる廻る車はメリーゴーランドで此処はもう遊園地だった。

羊の群れが天上を散歩しているような空の下。

母と向かい合い座る、此処はかぼちゃ型の馬車。規則正しく点滅するライト。砕かれた宝石が煌めきを放ちながら坂を転げ落ちてゆく情景の浮かぶ、ディスクオルゴールの音。

父と母は笑っている。外に立つ父に手を振る。視界から外され、また、回る。虹色の世界は回る。

上を見ると妖精たちが私たちに笑いかけながら飛んでいて、その中の一人が降り立って、綿雪のように軽やかに私の鼻の前で止まり、可愛らしくお辞儀して、小さな花をくれる。

私とお母さんはくすくす笑いながら、もうすぐお父さんが見えるねと囁き合う。

私は身を乗り出した。潰された蜜蜂がもがきながら地へ墮ちてゆくよう、オルゴールの音が捻じれ始める。

居たのは、もう笑わない父。手はだらりと垂れ、卵のように割れた。そして積み木の塔が崩れるよう倒れた。

どうしたのとお母さんに尋ねようと彼女に目を向けると、虚ろな目は何も捉えてくれなくて、体から血がじんわり滲みだす。私は後ずさって背もたれに体をぶつけて、その感触はあまりに違う、柔らかい。まるで車の座席みたいに。

そのまま、体が動かない。何ということだ。

私は人形になってしまった！

まばたきをするとひしゃげた車内へ。

咲き乱れた赤い花たち。運転席の父は動かない、人形の隣にいる母の、人形へと伸ばされた諸手はだらりと垂れて。二人も人形も、体には赤い花が咲いて……まばたきをした人形の目は濡れていて。

「グレートヒエン！」

絶叫し、ベッドから飛び出そうとしたグレートヒエンの肩をヨハネスは押さえ込む。

少女は叫んで暴れ続ける。

頭が熱い、脳みそが高速で回転する。ミキサーでぐしゃぐしゃにかき混ぜられているようで、声を出さなければ気が狂う。

「もう大丈夫。今は夢じゃないんだ」瞳孔を開き喉の潰れるよう喚くグレートヒエンを、慈しむようヨハネスは腕に包む。

「あの日……あの日に、私が言ったから……！」

ヨハネスは服の上から皮膚を攫まれ、血が滲む強さで握り締められるが、霧たつ森の深きを映すような煙った青の双眸は僅かにも動かない。

「私の所為で全部壊れた、私が殺した！何の罪もない二人だったのにっ！！」

どうしようどうしよう、ごめんなさい。ごめんなさいごめんなさい。私の所為で貴方達は。

「僕が赦してあげる。忘れていいよグレートヒエン」

安心させようとヨハネスは言うが、少女は激しく首を振る。

「違う……違う、違う！」

「すまない、アニー……」

整えられた睫を伏せ、ヨハネスは待機していた家政婦を呼んだ。アニーは慣れた手つきで暴れる少女の腕を掴み、注射針を射す。暴力的な眠りに少女は誘われ、ヨハネスの腕へ溺れた。そうしてヨハネスは彼女の髪を撫ぜんがら、静かに囁く。

「グレートヒエン。安心して、僕が居る。僕が赦してあげる。世界中の誰もが君を責めたとしても僕だけは赦して、そうして君を護るから。約束しただろう？だから、心配する事は何にも無いんだよ。僕の傍でだけはその罪を忘れて。ゆっくりとお眠み」

何処までも深くその声は、甘く酩酊とした子守歌にも似て。

だが少女は声の届かぬ世界で夢も視ずに闇の淵、死んだよう眠るの

だった。

「……成程。これは嫌な目に遭ったものだね、彼女は」
落ち着いたグレートヒエンを丁寧なベッドへ寝かせながら、ヨハネスは独語とも、アニーに語りかけているとも取れる口調で呟いた。

「猫の死骸なんてね。最近町で良く見られていたけれど、極力近付かせないよう注意は払っていたつもりなのに」

ヨハネスは凡そ二カ月前からこの町で起こっている、動物虐待事件の事を話していた。

野良や飼われているものを問わずに連れ去り、見る者なら誰しも目を背けてしまうような殺し方をされている。しかもそれを役場や学校、教会の前など、人目に付く場所に置いてゆくのだ。犯人について有力な手掛かりは、今の処何も無い。校舎裏にあった猫の死骸はアニーが処理しておいたが、犯人は後で何処かに運ぶつもりであるここに置いていたのだろうか。

「申し訳ありません」

「ああ、謝らなくても。君は危ない処を助けてくれたのだし。唯不運だっただけだから」

ヨハネスは無感情に謝罪するアニーに、柔らかな笑みを向ける。

「……ええと、ロビン君だっけ？その少年」

アニーははいと答える。今日あった一連の出来事は、全てヨハネスに話しておいた。

「新しく変わり始めた町に、面白い子がやって来たものだなあ……
……何だか色々面白そうだ」

そうしてヨハネスは闇に目を向け、淡く微笑んだ。

書きはじめた幻想たち

翌朝、教師は一枚のプリントを配布した。そこに書かれた内容を読んだ生徒らは喜びに目を輝かせ騒ぎ始める。

「はい静粛に、静粛に」教師が言うが、興奮した空気はなかなか静まらず。

「ギーレン君は休みか。轉向早々に休むとは」
何気なく発した教師の一言は強烈だった。場にはまた重い空気が充満する。

「これは困った。このプリント、明日まで返事が欲しいって先生方が五月蠅いったらなくってね」

「先生、先生」

晴れた日の日差しを思わせる明るい声がし、手をぱたぱたと振るのはキャサリン。

「何だいオア君？」

「私が持っていくですよ、ロビン君の家まで」

生徒全員の目が、野球ボールのよう大きく開く。

「どうして？君の家、正反对じゃない」呑気な教師の問いかけに、キャサリンは笑んで返した。

「話ができる機会だなあ、って思ったんです」

「そっかそっか。頼んだよ」

教師は頷き、キャサリンにプリントを手渡した。

平生は席に座り本を読むグレートヒエンだが、今朝手に持つものは違っていた。

机の影の掌にある鈍い光を返す鍵を、吸うように見つめている。

「グレートヒエン！」

声に顔を上げればキャサリンがぱたぱたとプリントを持ちながら向

かって来ており、グレートヒエンは鍵をポケットにしまう。

キャサリンの、毛先がくるりと丸まった明るい金髪は揺れる度に肩を擦れ、青い双眸は普段なら夜に瞳孔の広がった子猫の瞳のように愛くるしいが、今は泣き出しそうに崩れている。

キャサリンはグレートヒエンの机の前で急停止した。

「昨日あれから大丈夫だったの」

「大丈夫って？」

何言ってるの、とキャサリンは机に手を置き座り込む。

「だっていきなり倒れちゃうんだから。アニーさんたらそのまま帰るし、びっくりした」

「寝たら治ってたよ」

無機質な口調でグレートヒエンは答える。

「本当？だって顔色悪いよ……」

でもそれはいつもの事かなあとキャサリンは一人ごち、彼女にしては珍しく声の調子を潜めた。

「ごめんね、グレートヒエン」

気遣ったと思えば謝る。先程から不思議な事を言う人だと思いながら、グレートヒエンは尋ねた。

「……何が」

「だから」

キャサリンは唇を結び、そのまま口を開くべきかを決めかねているようだったが、やがて解いた。

「昨日、止められなかったから」

グレートヒエンは僅かに首を上げる。

「気分悪くならないでね。私ね、あなたより先に見ちゃってたんだよ、ロビンが笑いながら……あの猫に石を投げているの。」

まるで猫が、ダーツの的か何かみたいに」

グレートヒエンが何も言わず彼女から視線を下へ逸らすのを見、キャサリンは慌てて彼女の背に手を回す。

「ごめんねごめんね！具合悪くなった？」

「うづん、悪くは」

「良かった。続けていい？」

「いいよ」

キャサリンは息を吐く。

「昨日の。って、ロビンが転校して来た時にね、私早く学校に着いちやったからちよつと散歩、って思っつて、丁度あなたと彼のいた処まで歩いて行つたの。そうしたらね、笑い声と悲鳴と。……」

両方が聞こえて。怖かつたけど、覗いてみたらロビンと猫が」

グレートヒエンは掌に薄く汗が滲むのを感じる。

キャサリンはそんな彼女の様子を気にしながらも続けた。

その時訊こえた悲鳴は初め、猫だと分からなかつた。例えるなら刃を向けられた赤子の鋭い泣き声のような。だが違うのはその叫びは、誰かに助けを求める種のものでは無いという事だつた。

それに向けられた笑い声はさながら、気違いじみたハイエナ。影から見たその惨状に目を逸らし逃げたかつたがそれらの意に体は従おうとせず、釘付けになつたよう見ているしかなかつた。

猫が息絶えるとキャサリンの体に張り詰めていた緊張が解け、壁に背をついてずるずると力無く座り込もうとする。だが靴が小石を踏み、それに体が転がる。尻餅を突いた音と共に小さく声をあげてしまい、周囲の気配が緊張に包まれるのが分かつた。

慄きながらも顔を上げれば、キャサリンを見下げるのは赤毛の少年。「……すごく怖い顔で睨まれて。こつ、脚でばんつと壁を蹴つて。私の耳すれすれに」

キャサリンは手を耳の傍に寄せ、その時の状況を真似た。

「それで『今見たことは誰にも言うな、言つたら殺す』って……」

グレートヒエンの額には脂汗が浮かんでいた。これ以上続けられるのは嫌だ。

堪え忍ぼうと手を握れば、滲んだ汗に指が滑る。

「そんなの大丈夫だよ。何かするって訳でも無いんだし？敵意の無い人間は、見逃してくれる」

「根拠は何？魔女に、敵意とかは関係ないじゃん」

「根拠って？」

少女らの言葉に、キャサリンは無邪気に笑う。

「魔女のおばあさん。もう死んじやっただから！怖がったって意味ないよ」

「でも彼がさ」

更に続けようとするイタをパミーナが止め、声の調子を明るくものに切り替える。

「それより今日遊ばない？キャサリンのお父さん、またぬいぐるみプレゼントしてくれたって言ってたよね。あたしらに見せてよ」

キャサリンは顔を輝かせた。

「そう、パパがくれたんだよ。犬のお人形！私の手いっぱいに広げたってまだ足りないくらい大きくて、毛もふさふさで目もおっきくて可愛いんだよ。耳なんか垂れてるの、すごいでしょ？」

「うん、すごいすごいよ」

キャサリンの興味が簡単に逸れた事に、二人は胸を撫で下ろす。

「じゃあ学校終わったら、キャサリンの家に集合ね」

嬉しそうに笑ってから、キャサリンは目を開く。

「でもどうしよう。そうしたら、ロビンにプリント渡せなくなっちゃうんだよなあ。でも遊びたいしな」

「プリントなんか明日でいいじゃん、それが先生に頼むとかさ。仕方がないって、ね」

二人が諭すが、キャサリンは納得のいかない風。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

キャサリンの、天井を見上げていた目が不意に下ろされ、蚊帳の外に出され静かに先行きを眺めていたグレートヒエンを見る。そうしてみるみる目が大きくなり、最後に光が入った。

「そっだグレートヒエン！」

キャサリンはにこにここと笑い、訳の分からないでいるグレートヒエンの机に顎を置き、上目遣いになる。

「ねえねえ、私の代わりにロビンの家に行つて、プリント渡して来てくれないかなあ？」

「ちよつと……、何言つてんの、キャサリン」

その言葉にたじろいだのは、イタとパミーナだった。グレートヒエンは首を僅かに動かしたただけだ。

「だつてね」

キャサリンは少女へ向けウインクをする。その動作が大層愛らしかったのだらう、キャサリンを盗み見ている男子らは嘆息を漏らした。こつちの気も知らずにといい風にパミーナは彼らに睨みを利かせた切り目を向ける。

キャサリンは無邪気で純粹だ。子猫のような愛らしい容姿で男子に人気があり、その裏表ない性格も同性にも憎まれない所以なのだが、時に、と言うよりはしよつちゆう問題を生み出す。然も無意識に悪気なく。また彼女は気紛れで、周囲はそれに振り回される羽目になるのだ。

だがどんなに世話を焼かされても見捨てられない、不思議に惹かれる魅力がキャサリンにはあった。

グレートヒエンにだけはキャサリンの言葉と、ウインクの裏にある意味が汲み取れた。協力しようつて約束したからお願いね、と。

「分かつた」

そんなやり取りが無くともやはり、引き受けてはいただらうが。元より断る理由がないのだから。

キャサリンは飛び上がらんばかりに喜び、パミーナとイタは困惑し眉に皺を寄せた。

「やったやった、ありがとう！」

「グレートヒエン……無理しないで」

「無理……？」

「いや、だから」

イタは疲れを感じ、額に手を当てる。余り話した事のない少女は、記憶が間違っていないければ大体一年前にこの町に転校して来た筈だ。それだけ居るなら事情は分かるってものだろうに。

「本当にありがとうグレートヒエン、じゃ、明日どうなったか教えて！」

「うん」

イタとパミーナは顔を見合わせ、ああもうどうしようもないと頷き合った。

「じゃあ、ポスト！ポストに入れてくるだけね、分かった？」

イタとパミーナは殆ど同時に迫り、キャサリンとグレートヒエンの間に割り込む。迫力ある目の力にグレートヒエンは気圧され、黙って頷くしかなかった。

いつもならば、アニーの運転する車は学校が終われば真っ直ぐ家路に着くのだが今日は違う。ギーレンさんの家へ行つて欲しい、とグレートヒエンが彼女に頼んだからだ。アニーは少しばかり驚いていたようにも思うが、やがて平生そうであるのと同じに、二つ返事で了承してくれたのだった。

信号の中に描かれたアンペルマンが青を示す。家に帰るならば直進するべきその交差点を左折した。

鞆から本を取り出そうとして、今日は珍しく持って来るのを忘れていたのを思い出す。手持ち無沙汰で心もとなく、意味もなく前にいるアニーに目を遣った。不思議な人物だと思う。約一年半、一日の半分以上の時を共にしていてもだ。

グレートヒエンが今住んでいる家に来るより遙か昔から雇われていたのだが、あらゆる人間に対して定規で線引きしたよう全く一定の同じ距離以上近付こうとはしない。目線も殆ど合わず、微笑んだ顔など拝めた試しがない。だがするべきは完璧にこなす。

喜怒哀楽といったものがあるのかと初めのうちは心配したが、一月程共に居ると彼女の性格が分かって来た。妙な拘りがあるようで、出会いたての頃グレートヒエンはアニーを「さん」付けて呼び敬語も使っていたのだが、すると彼女は「アニーと」と言う等して背を向け、訊こえない振りをするのだ。精巧な機械さながらに動くというのに、どうも彼女は一昔前のメイドのような立ち位置を望んでいるらしい。そうしなければ仕える側の此方に反抗するというのは、可笑しな話のように思うが。

まじまじと見過ぎていたのだろう、視線を向けられる。グレートヒエンは俯いて逸らし、次は窓の外を眺める。この町の景色は苦手だ。慣れていないのでも、好きになれないのでもない。住人の少なく、顰めていた息使いさえ絶えようとしていたこの町は、近年になって

国の西側から送られ始めた溢れるまでの資金を使い、過去を切り捨て新たな道へ進もうとしている。その変化の様はめまぐるしく、壊され、新しくなってゆく建物達を見ているだけで巨大なうねりに飲み込まれ、酔いそうになるのだ。

大通りから逸れ奥へ、細く急な坂道を下ってゆく。ものの数分もしないうちに色がこそげ落ちうらぶれた景色が広がった。人の住んでいるかが疑わしい家々が所狭しと、必死で地に爪をたてているかのよう危なげに立ち並んでいる。前に引かれるので車も遅く走らせなければならなかった。狭い道は一台通るのがやっとで、凸凹した石畳に当たりタイヤが上下を繰り返す。

そして一番下、裸の木々を背に建つ切り妻屋根の家の前に着く。それはローズマリー・ギレンの家。

いつの間にか空全体に広がった灰の雲に光は閉ざされ、柵で囲われたその家は魔女がかき混ぜる鍋から沸き立つ禍々しい湯気に包まれているかのようだった。人の住んでいる気配がなく、錆の浮いた柵の扉には鎖が幾重にも巻かれ、南京錠が掛けられてある。

時の流れのうちに掃き捨てられ今にも崩れ落ちそうで、それでいて不可解な力で立っているような魔女の家。壁は所々ひび割れ、汚れた全ての窓ガラスは派手な花柄のカーテンに隙間なく覆われ、中は伺えない。

柵と家の間に広がるハーブの庭は成人が二人、縦に寝そべった程度の広があった。花の咲いていないハーブ達は怪しい瘴気を吐いているように思えた。

両端に生えた二本の木は、土の下に埋まった屍の手がもがいて飛び出たよう。

静寂。その罨のような静けさ。

今にも壁を爪で引っ掻く音か悪魔の笑い声でも訊こえて来るようでおおよその人間は本能的な恐怖を覚えて踵を返し逃げ仰せらるうその気配に、しかし車から降りた車椅子を引く女性とその乗り手の

少女は無感情な目とガラス目を、それぞれ向けるのみだった。

アニーが僅か、車椅子を押し進めれば、屋根の上に羽を休めていた数羽の鴉が不吉に鳴き飛び立つ。

柵の手前には呼び鈴などが無く、来訪を告げる手段が見当たらない。

「ポストに入れておきます」

アニーが言う。キャサリンとの約束もあるが呼ぶ手段が見つからないので、此処はパミーナらの言われた通りにするべきだろうかとグレートヒエンは頷き、アニーにプリントを渡そうと手を上げる。そのプリントに書かれているのは、約二か月後に迫ったグレートヒエン達の学校の、開校五〇周年記念パーティーについてだった。二年前に新校舎へ移り変わった事や、新しく生まれ変わろうとしている町全体の繁栄を願い盛大に行う計画らしく、父兄らに出席の有無を尋ねる旨が書かれていた。

プリントを入れようと、アニーがポストの元へ歩んでゆく。

グレートヒエンは家を見上げる。

決して誰も近づいてはならないと言われるこの家には、色々な噂がある。

好奇心に負けた少年がこっそりと家の中に入っていくと、そのまま帰っては来なかった。

アトロピン、トリカブト、ベラドンナ。その他のあらゆる怖ろしい薬草が植えられている場所が庭にある。これは本当らしい。

ある日僅かなカーテンの隙間を覗くと、見るも穢らわしく、口をするにも憚られる、黒魔術の儀式が行われていた。悪魔の淫婦めと薬屋を営む男が町の人間に言い触らした翌日、彼は廃人となった云々。何処までが本当で何処までが嘘かは判然としない。だが町の人々は四〇年も昔からこの家に棲む女性を魔女だと信じ、死んだ今も彼女の影に怯えている。

姿見が変わらないのは子供を食べているからだ。魔女がワルプルギスの夜に箒に跨り、ブロッケン山に飛んでゆくのを確かに見たという他愛もない噂に始まり、ベリエスの息子が高熱にうなされた後に

知恵遅れになったのは魔女に触れたから。信心深いビルギットの子供の両腕が奇形になって産まれたのも、彼女が子供から目を離れた隙に悪魔の子と取り換えたからというもの。ケルステン一家が誰にも告げずに一夜のうちに町から消えたのは、魔女が彼らに呪いをかけたからだというものまで。

数年に一度は原因の分からない奇妙な事件が起きその度、それは口ズマリー・ギーレンの所業とされた。十六年前にあった酒場での出来事では。酔いも手伝ったのだらう、其処で酒を呑んでいた者達全員が魔女について目を剥くような悪辣な言葉を吐き、遂には殺そう、と叫ぶまでになった。だがその夜のうちに酒場にいた全員に様々な形で災難が襲う。

それから町では彼女についての噂話がいよいよ暗い翳を帯びだし、反して声は低められたが、逆に際立つようになったのだった。

突如吹いた風の塊は平手打ちのような痛みがあつて、グレートヒェンは顔の前に手を翳す。次に手を退けた時にはアニーの指からさらわれたプリントが眼前を掠め、庭のニワトコの木、アニーが背を伸ばせば何とか届きそうな枝に掛かってしまった。

アニーは無言で枝へと向かうが、次に流れたそよ風がプリントを浮かせて庭の奥、土の上にかさりと虚しい音をたてて落としてしまった。

表情を変えないままアニーは、微動だにせずプリントを見つめている。どうやら仕事をこなせなくなりそうなこの現状に次はどう動けばいいものか、まるで分からないのだらう。

風の所為だから仕方が無い。だから帰らう、その声を掛けようとした時。

いい、と耳鳴りがしたのを最後に、あらゆる音が潰えた。

風が止み、靡いたままにハーブも固まる。そして人形にでもなったよう体が動かない。この風景全体が写真にでもなったよう、何もかも止まった。

素晴らしいねグレートヒエン。見てご覧、花達の彩りを。耳を傾けて聞いてご覧。僕らを盛大な喜びに包む、大地の大合唱を。突如耳に届いた、少しおどけた声は父のもの。

ナスタチユーム。これはサラダに入れると美味しいんだぞ。オレガノとかタイムはパスタとか、ムスカに合う。冬が過ぎたら、世界は無料のスーパーマーケットになるのさ！

お腹空いてるんだね、お父さん。

で、誰がそれを料理すると思ってるのかしら。おめでたい人ね。

凜と透き通った母の声。

そんなにぼんぼん注文されたって出来るものじゃないわ。大体、今日弁当を作るのだって面倒で仕様がなかったのよ本当は。

ごめん、ありがとうねえ。

誠意が足りない。

この時の事なら憶えている。春の始めの快晴に、ピクニックに絶好日和！と無邪気に父は笑って、掃除の絶好日和よと母は溜息を吐きながら黙々とバスケットにサンドイツチ等を詰め込み、私もそれを手伝って、正午前に出掛けた。

睨む母に、父はひたすら謝る。それはとても空っ下手で、彼女はますます機嫌を悪くしてゆく。

私はそんな二人の間に割り行つて、彼らの手を繋ぎ駆け出すのだ。

私もお腹空いてきた。あそこ。日の当たるところで食べよう！

ぱたぱたと足音が近付いて、花と太陽の匂いがして、過ぎ去るのは陽炎のように不鮮明な、昔の思い出。

麦藁帽子を被った母が、バスケットを持った父が。彼らの手を引くのは私。

声をたてて笑いながら魔女の柵をすり抜けて、そのまま角を曲がる。

「……………待つて」

風に溶かされそうに細い声で呼ぶ。角を曲がり見えなくなる前に振り返ったのは私だった。

目を丸めて不思議そうに私を見て、そうして幸せそうに幸せそうに私へ笑つのは昔の私。

「おいていかないで！」

叫べば戒めは解かれ、柵を突き進むと当然のようにすり抜けて、そんなもの気にも留めず唯彼らの元へゆこうと車輪を回す。

「私はここだよ……！！！」

車椅子は土の上を滑らかに走り、早さに釣り合わずとも容易く角を曲がる。居ない。息もつかずもう一つを曲がり、其処で異様なものを見た。

扉だ。地面から生えている。壁も何も無く、唯三メートルはある大きな扉だけが聳えていた。肩を上下させながら、どうすれば良いのかなど分かっていた。古びた鍵を取り出し、扉の鍵穴へと押し当てるのだ。だが焦った手は思うままには動かせず、嵌ってくれない。逢いたい。一度だけで良いんだ、お願いだから逢わせて、話させて強く、一心にそれを願う。

………すると拒むようだった穴に吸われるように、カチリと音をたて鍵が入った。

一瞬間の静寂の後。

大地が裂け、天にまで達するような轟きと共に扉は開き、その奥に広がる濃い闇の渦が見えた。

そして闇は無数の茨のように広がり少女の体中に巻き付いて、彼女が驚くのも遅く、中へと引きずり込む。

そうして扉は閉じられた。

アニーはグレートヒエンを捜しながら、魔女の家の周囲を歩いていた。

「おい！」

すると背後から訊き覚えのある声がし、見ると赤狐のような髪をした少年が、息も絶え絶えにこちらへ走って来るのが見えた。

「あいつはっ!？」

アニーは数秒をかけて目を瞬かす。

「あいつとは誰です？」

一拍置き、ロビンは牙を向けるよう叫んだ。

「お前がお護りなさってる奴に決まってるだろうが!」「マルガレーテですか。私も捜している処です」

「使えねえ……愚図女……!」

少年らしからぬ迫力の怒気は明らかに事情を知っている風で、そして怒り、焦っていた。何を知っていると問おうとしたが、少年は目アニーを睨み、

「帰れ」と唯それだけを唾を吐くように言い放ち彼女を通り越す。

アニーは呼び止めようとす。だがどういつ訳か、振り返ると少年は装飾の凝らされた柵の向こう側にいた。何と素早い動きかと呆気にとられている内に家の中へと入っていく。ドアを閉める時にぎい、と全身の毛を逆立たせるような音が響いた。

アニーは柵まで走り、頑丈に閉ざされてるのを確認し、無感情に見据えた。

* * *

薄く開いた瞳を突き刺さす光に、眉を顰める。目の上を黒い塊がちらついで、手を翳し閉じていたいとせがむ瞼をこじ開ければ、空が

緑色になつたような錯覚を覚えた。

頭上は一面の広葉樹。其処から流れるのは、幾筋もの光。森の中だろうか。

土は柔らかく、投げ出された体に草花の弾力は羽毛のようだった。遠ざかつていく小さな白いものに、黒い塊は蝶の影だったと理解する。いかにも平和的な青空にはいつもの冬特有の重苦しさがなく、優しい目差しのような木漏れ日も暖かな土の匂いも、うららかな春のそれだった。

空の高さ、眠りに誘われそうな暖かさ。グレートヒエンは仰向けになり空を見上げる。

こうして直接土の上で寝転ぶなど、どれ位振りだろう。

……車椅子からは、いつ降りた？

疑問に眠気は失せ、首を動かして周りを見回せば蝶の飛ぶ先、一〇メートルはあるう長さの処に何か塵の塊があつた。

違う事を願いながら目を凝らせばやはりそれは、紛れもなく元は車椅子の形をしていたもの。但しもう使えはしないであろう事を、瞬時に解せざるを得ない姿だった。

どちらも円ではなくなった車輪は片方が外れ、片方は数字の八の形になっている。本体は無残に折れ曲がり錆びたパイプが剥き出しになり、巨人に踏みつぶされたようひしゃげていた。

そして草花は、まるで車椅子が長い年月此処にあつたと言うようにして全体を包み込んでいた。先程の蝶が花の一輪に止まり、花は静かに撓んで彼を受け止める。

背筋を灼くような冷たさが走った。

さっきまではギーレンの家の前にいた……それは確かだ……のに、此処は何処だ。ああそうだ、幻を視たんだ。幸せだったあの頃の。追いかけて、その後の記憶がない。

とすれば此処は庭の中だろうかと思つたがそれにしては広すぎ、漂う空気すら違う。こちらの静寂は澄んでいる。

すると突然、頭上で何かが動く音が訊こえた。目を向けると、さっ

きまで確かに無花果の二つ分程度の大きさだった蕾が綻び、小さな隙間から尖ったものが出、それには二つの穴が開いていた。下には目に見える気孔の様なものがある。何処かで見たような並びだ。全体は皺だらけのねずみ色。

更に開くと一番上に黒い半円状のものが二つ現れた、其処で気づく。まるで人間の、醜く老いた顔のようだ。尖ったものは鼻、気孔は口、二つの黒は目。周囲を覆う黄色い花びら達は綻ぶ程にひからびてゆく。

黒い目がグレートヒエンを捉えたかと思うと気孔を開き、首を締め上げられたような声を上げた。それが合図であったように、周囲にある蕾も次々にメリメリと不愉快な音を立てて芽吹き始め、十数もの老婆の顔が現れる。

初めに顔を見せた花の気孔が、口内を全て晒そうとするかのように大きく広がり、端に緑色の液体を溜めてゆく。それは丸く太った雫となってグレートヒエンの腕に落ちた。途端に衣服の布は泡立ちながら溶け、その下にある肉も溶かされる。

火を落とされたような痛み。グレートヒエンは小さく声を上げた。それに反応したように、全ての花が一斉に彼女へと顔を向け、気孔を開く。

質の悪い冗談のような光景の下、グレートヒエンは呼吸を荒げているが、息を大きく吐いて口を閉ざした。粘り気の強い唾液のような緑の液体が溜まるのを眺めながらも、肋骨を砕く激しさで打っていた鼓動は次第に落ち着きを取り戻してゆく。

お人形だよお前は。一人じゃあなんにも出来ない、実に不様で滑稽な。

不意にロビンの言葉が蘇った。

その通りだ。呆れる程本当に、彼の言葉は的を得ている。

だが、この人形は痛みを知っている。

今から我が身に与えられる、この死を以ってしてなら。彼らの苦し

みをわずかでも背負う事が出来るだろうか。脚が動こうが、元より逃れようなどとは考えない。ただ甘受する、それだけだ。辿り着く先は地獄しかないだろう。その業火で焼かれ続ければいい、元よりそれが望みなのだから。

諦観は睡魔に似ている。身でも不思議に思うが、このおぞましい生き物を前にして穏やかな眠りを覚え始めている。怖ろしくない筈はないのに。

ごめん、と、もう逢う事のない青年に心の中で呼びかける。花の口から雨のように液が落とされた時、少女は目を閉じた。

突如、遠くで風の唸りが訊こえた次に少女の姿は消え、刹那もない差で雫が地面を穿った。逃すまいと、次々に蕾を開き始める点在する同種の木々の真下、森の中を、吹く疾風よりも速く、その黒い影は彼女を抱き留めたまま地を蹴って飛ぶ。

(暖かい.....)

誰かの胸に抱かれているような気がして、グレートヒェンは二度と動かす気のなかった瞼を再び上げた。

体に巻き付いた腕。その白く、死人めいた肌。

その誰かはグレートヒエンを抱いたまま森を抜ける。

そうして小さな花が咲く野原に降り、彼女を丁寧に座らせた。と思うと、腕を解くや否や風のようにグレートヒエンから遠ざかり、踊るように回転して振り返る。その姿にグレートヒエンは瞬きを忘れた。

伝承や童話の中に登場する妖精か、或いはギリシア神話のニンフか。どちらにせよその女性には、幻想的な美しさが存在していた。

年齢でいうなら二〇、二一。胸元に刺繍を施したエンパイア調の、純白のドレスを纏っている。その姿は白銀を散らすかのように煌めいており、輪郭も臍に思えて幻めいている。

橙の瞳は名もなき小さな泉のように瑞々しい光が溢れんばかり。脛まで伸びたどぎつい巻き髪は見事な銀。頭上には花冠。

だがグレートヒエンが何より驚いたのは、その背に突起している二枚の羽だった。

右の背にあるのは白い、天使を彷彿とさせる羽。左には青く光るモルフオ蝶の翅。それらは彼女の呼吸に合わせてゆつたりと左右に動いている。

麗しいそのかんばせはしかし、双眸が無邪気な色を帯びている為にバランスを欠いているように思われた。

堪え切れない嬉しさを、必死に抑えているような笑顔と瞳でグレートヒエンを、穴が開く程に見つめてくる。今にも飛びかからんとする子犬さながら。惑う少女は、何か言わなければと見覚えのある鉤爪と肌の色を頼りに口を開いた。

「………抽斗の」

「いやあっ!!」

耳をつんざく絶叫を発し、女はグレートヒエンの元へ「飛んで」きた。驚く間も無く再び腕に抱かれる。抱くというより締め付けられ

る。腕が回された体は圧迫され、顔は肩に埋められ息が出来ない。

「やつと見れたわ、あなたのお顔！……」不気味な歌のよ
うな女のしゃべりは、グレートヒエンへの賛美を興奮してまくした
てるがあまりに早口なので訊きとれない。

「……そーだわ。わたくしあなたのために、歌を作ったの。
あなたがよく眠れるよーにつて、子守唄をたーくさん！この間鳥
に訊かせたーらそーのまま、石みたいに横になって、いくら起こし
ても動かなかつたのー。だからすぐよく効き目のある子守歌なのよ。
毎晩歌つてあげるわねー！」

骨が軋む音を上げる程に抱き締められ、グレートヒエンの腕はぐつ
たりと下ちる。すると次には勢い良く放され、鉤爪を持つ大きな手
で頬を包み込まれた。朦朧とした意識の中で見える橙の瞳に、呑ま
れるよう見つめられる。

そうして子供のように笑っていた顔は、慈しみに溢れた聖母の微笑
となった。

「……夢じゃないのね、本当なのね？あなたは今、わたく
しの目の前にいるのね？」

悲哀と喜びが映る、零れそうな光。直視すれば胸に痛く、グレート
ヒエンは顔を伏せる。

「きちがい女、探したわ」

甲高い声。見上げると夢にいたもう一人の登場人物であるねじ人形
が黒い鳥の爪に掴まれて飛んで来、地面に脚が着くと鳥は空へと消
えた。

「まーあごめんなさいっ。きれいに忘れていたわ」

人形の背には、古臭い木製の鞆が革の紐で括られていた。以前出会
った時には無かったものだ。

精も根も果てたというように体を左右に揺らしながら歩いて来、ま
ず羽の女を持っていたステッキで恨みを込め小突いた。

「いったい！」

目に涙を浮かべた女の抗議を人形は無視し、グレートヒエンへその

魚のような口を横に伸ばし笑みのようなものを作り、帽子を外した。
「お久しゅう御座います、マルガレーテ様。我らの希望！女王も貴女様のご到着を大層喜んでおられます。つきましては……」
「やめて」

少女の声音は鞭のように、人形の言葉を地に叩きつける。人形の動きはねじが切れたよう止まった。

「貴方達は喜ぶ事なんて出来ない、嘆かなければならない。待ち侘びていた人間は片端の死に損ないだから」

上げた顔にある双眸は死人のようだった。羽の女とねじ人形は押し黙る。

さつきも自分は命を棄てようとしていた。そんな人間が、どうして目の前の彼らの願いを叶えてやれるだろうか。涙され、崇められるなど以ての外だ。

「ど、どーしてそんなに悲しい事を言うのっ？」

羽の女はわっと泣きだす。目からは、ガラス玉のような涙がぼろぼろと落ちる。

女の声だけが森の中をこだまする。本音を言えば期待に心えてやれない事を謝りたい。助けてくれた事に対し、偽りであっても感謝の言葉を述べたい。

不意に人形が尋ねる。

「ではグレートヒエン様、これからどうなさるおつもりなのですか」
「………一人で帰る」

グレートヒエンは項垂れる。その言葉がいかに馬鹿げているかは、自分が一番良く知っていた。それは人形も分かっている。人形は問いかける。或いはそれは、狙いを定めまくし立て始めたようにも思えた。

「それは………どのようにして」

答える事が出来ない。人形はその間を逃す事なく突いた。

「私どもは、貴女様がこちらに来られる方法は鍵を使ってという事は分かっておりますが、それ以外の事は一切存じ上げません。です

から。どのようにすれば貴女様がお一人で安全にお帰りになる事が出来るのかを、お伝えする事が叶いません。けれど」

人形は女の腕をステッキで叩く。女は泣きながらも顔を上げた。

「どうか私どもに、貴女様がお帰りになられる手段を探すお手伝いをさせてください！」

グレートヒエンが口を開こうとするより早く、人形は彼女へ畳みかける。

「何と仰られようが付いてゆきます！貴女様に尽くす事こそが私どもの使命、望むべくものなのですから」

「そーよ、わたくしあなたにずーっとついて行くんだから！」

女はグレートヒエンの手を再び強く抱く。何処にも行かないようにと。どうせ一人では、地を這う程度しか出来はしないというのに。

彼らの目は無垢な忠誠心に爛々と輝いていた。どうか棄ておいて欲しいと悲願しようが、彼らは訊く耳を持たない。有無を言わずに自分を抱いて連れてゆこうとするだろう。

グレートヒエンは小さく頷いた。

女は再び叫んで喜び、ねじ人形は安堵の息を漏らす。

その時、木陰から葡萄らしき果物の輪郭が現れたが、音も気配もあまりに微かだった為に気付く者はいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2204g/>

リトル・ギル・キングダム

2010年12月31日02時40分発行